

# 日本語達成動詞の 結果性のキャンセル可能性について

阿久澤 弘陽

キーワード：達成動詞、自律性、漸進性

## 1. はじめに

動詞の語彙的アスペクトの先駆的研究である Vendler (1967) は、動詞が、状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞に四分類できることを指摘した。その中でも特に達成動詞は、動作主の活動と、対象の変化という複合的なイベントで成り立っている。典型的な達成動詞としては以下のような例が挙げられる。

(1) 太郎が薪を燃やした。

たとえば達成動詞「燃やす」を用いた (1) の例であれば、「太郎が薪を燃やす」という動作主「太郎」の活動と、「薪が燃えた状態に変わる」という対象「薪」の変化を意味している。つまり、「燃やす」という動詞は、「燃える」という意味を語彙的に含んでいる (entail) ということになる。したがって、「～を燃やした」と表現した後に、その行為の対象が「燃えなかった」と表現することは意味的に矛盾し、容認不可能な文となることが予測される。実際に英語の「burn」は、前半での主張を後半で否定すると容認不可能な文となることが指摘されている。

(2) \*I burned it but it didn't burn. (池上 1981: 266)

しかし、例 (2) と対応する日本語の文は、例 (3) に見られるように、容認可能であることが指摘されている (アラム佐々木 2001, 池上 1981 など)。

(3) 燃やしたけれど、燃えなかった。 (池上 1981: 266)

本稿では、(3) のような後件が前件の対象の変化の結果を打ち消しているように見える例を、先行研究にならって「結果キャンセル構文」と呼び、日本語で当該構文が容認可能となる原因を分析することを主な目的とする。以下 2 節では、結果キャンセル構文に関する

先行研究を挙げ、分析方法を概観する。3節では、先行研究の分析方法では捉えられない事実があることを指摘し、本稿の立場と分析方法を述べる。そして4、5節で当該構文の成立可能性に対する具体的な分析を行い、6節で結論と今後の課題を述べる。

## 2. 先行研究概観

結果キャンセル構文は、前件と後件で意味的に矛盾するために、語用論的な立場からその意味的矛盾を救う規則を定式化するような研究が存在する(佐藤 2005, 蔡 2004 等)。また一方で、意味的には矛盾するのであるが、動詞ごとに変化結果のキャンセルの可能性が異なることを前提に、動詞がもつ結果性の強弱の観点からの分析も試みられている(青木・中谷 2013; アラム佐々木 2001, 池上 1981, 影山 1996, 崔 2009, 宮島 1985, Aoki and Nakatani 2013 等)。このように、当該構文の分析の方法は、前者の様に語用論的な立場から分析するものと、後者の様に語彙意味の観点から分析するものに大まかに分かれるといえる。以下では前者の立場をとる佐藤(2005)と、後者の立場をとる池上(1981)を取り上げて、それらの分析を紹介する。

### 2.1 佐藤(2005)

佐藤は、結果キャンセル構文の容認可能性が、動詞の意味によるものではなく、基本的に日常的な推論に基づくものであるとしている。実際に、日常の推論が当該構文の容認可能性にかかわっていることを、アンケート調査によって示している。

(4) a. レールのさびついたカーテンをあけたけれど、あかなかった。<39.7>

b. カーテンをあけたけれど、あかなかった。<29.2>

(佐藤 2005: 101、<>内の数字が高いほど容認度が高い)

例(4)に見られるように、「さびついたレール」によって実際にカーテンが開けにくくなるという推論が働いているために、例(4b)の方が容認可能性が低いとする。そして、当該構文が容認される原因が、「～しようとしても～することができない」という典型的な意味の型を持つためであるとし、この型に近いと判断しやすいほど許容度が高くなるとしている。

### 2.2 池上(1981)

池上は、上記の例(2)、(3)のような日英語の差を、日本語が英語とは異なって、達成動詞の場合でも、「他者へ向けられた行為を表わす動詞まで、言わば「自動詞」化する傾向(池上: 270)」があるという日本語特有の特徴で説明している。この「自動詞化」は、日本語が英語とは異なり動詞の目的語が統語的に必須でないために、「行為の影響を蒙る対象」が目的語に現れなくてもよく、その場合に、「行為の他者指向性の意味合いが弱められる」

ことによる。実際に、以下の例 (5) を挙げて、行為の対象の有無で容認可能性が異なること、また、その目的語が「湯」のように結果目的語か否かでも容認可能性が異なることを示している。

(5) a. 沸かしたけど、沸かなかったよ。

b. ?水を沸かしたが、沸かなかった。

c. \*湯を沸かしたが、沸かなかった。

(池上 1981: 270-271)

また池上は、日本語に「単数」、「複数」の区別がないことが、結果キャンセル構文の容認可能性に影響していると主張する。英語では、文法上の数や、不定冠詞の使用を通して、行為を受ける対象が「個体」であるか、「連続体」であるかが区別されているが、日本語にはそのような区別が存在しない。そのために、日本語の裸名詞が「連続体」であると判断されやすく、その場合には、輪郭のはっきりしないものに対する行為となるので、「完了」の概念と結びつきにくく、当該構文が容認されやすいとしている。このように、池上は、日本語の当該構文の容認可能性に、対象の有無やその定性などを含めて分析を加えた。

### 3. 本稿の立場

本稿は、自他交替する達成動詞を対象として、動詞の意味の観点から結果キャンセル構文を分析する。語用論的な観点からの分析は、意味的な矛盾を救うための一般的な原理を定式化できるという利点がある一方で、多くの先行研究で指摘されている動詞間の容認可能性の差異<sup>1</sup> (青木・中谷 2013, 宮島 1985, Aoki and Nakatani 2013 等) に対して具体的に説明を加えるのは困難である。そのため、本稿では、結果キャンセル構文が成立する語用論的な原理を定式化するのではなく、動詞の内在的意味特徴から「結果のキャンセル」のしやすさに関して分析を加える。「結果性」が動詞の意味からだけではなく、目的語の性質や副詞句全体の意味などを含みこんだ節全体の意味から導き出されるものであることは、先行研究ですでに認められているところであるが (アラム佐々木 2001, 池上 1981, 崔 2009, 佐藤 2005 等)、本稿では動詞の内在的意味特徴から結果キャンセル構文の容認可能性を探ることを目的としているので、動詞以外の結果性に関わる要素を排除した形で分析を進める。また、しばしば結果キャンセル構文の対象とされる以下のような (6)、(7) の例は分析対象としない。

(6) 太郎は手を洗ったけれど、手はまだ汚れたままだ。

(7) \*太郎は財布を見つけたけれど、財布は見つからなかった。

---

<sup>1</sup> 本稿の「容認可能性の差異」とは、話者間に見られる判断の差異ではなく、動詞ごとに認められる当該構文の容認可能性の差異である。話者間の差異に関する分析は蔡(2004)などを参照。

例 (6) は、「手を洗う<sup>2</sup>」の語彙意味内に「手がきれいになる」という変化結果を含んでいないために、後件で「手が汚れたままだ」としても意味的な矛盾を起こさない。また例 (7) の「見つける」のような到達動詞は、先行研究で容認不可能であるとの判断で一致しており (Ikegami 1985 等)、到達動詞の間に容認性の差異はそこまで見られない。本稿では、結果キャンセル構文の容認可能性が達成動詞に限って問題になることを踏まえ、この「達成動詞」そのものの意味から当該構文の分析を試みるものである。また、例 (2)、例 (3) に見られるような日英語の差異に関しては、池上 (1981) が指摘するように、対象の数や定性によるものだとしておき、本稿では日本語の達成動詞のみを扱う<sup>3</sup>。

## 4. 動作主と対象のかかわり

### 4.1 達成動詞の意味構造

本稿では、達成動詞の意味構造の表示に語彙概念構造を用いる<sup>4</sup>。先行研究ですでに指摘されているように、達成動詞は二つの事象から成り立つと考えられ、以下の様な語彙概念構造が考えられる (アラム佐々木 2001, 影山 1996 等)。

- (8)  $\underbrace{[x \text{ ACT}]}_{\langle \text{活動事象} \rangle} \text{ CAUSE } \underbrace{[y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-z}]]}_{\langle \text{変化事象} \rangle}$

例 (8) で示したように、本稿ではアラム佐々木 (2001) の用語を借りて、動作主が活動する  $[x \text{ ACT}]$  の部分を  $\langle \text{活動事象} \rangle$ 、対象が変化する  $[y \text{ BECOME } [y \text{ BE AT-z}]]$  の部分を  $\langle \text{変化事象} \rangle$  と呼ぶ。本稿では、例 (8) で示されているような達成動詞における  $\langle \text{変化事象} \rangle$  の概念構造が、他動詞に対応する自動詞で表現できると仮定する。この仮定のもと、本節では、達成事象を表す他動詞と、その他動詞に対応する到達事象を表す自動詞の意味を考え、その二つの事象の関係性を議論する。

### 4.2 動作主の対象に対する変化の責任性

結果キャンセル構文の容認可能性を分析するにあたって、動作主  $x$  と対象  $y$  のかかわり方について検討しなければならない。現実の問題として、動作主が対象に対する何らかの変化を使役する際には、ある「行為」が存在し、その動作の結果、ある「変化」が生じるといった使役の連鎖が存在する。たとえば、「ビールを冷やす」のような場合を考えてみると、動作主にとって「ビールを冷蔵庫に入れるなどの行為を行う」ところまでが直接的な働きかけであり、「ビールが冷える」という変化事態には直接的にはかかわっていない。ここで

<sup>2</sup> 青木・中谷(2013)、Aoki and Nakatani(2013)はこのタイプの述語を「疑似完結述語」と呼ぶ。これは通常の文脈では、ある後件の事態を予測するのであるが、実際にその予測された事態が実現しなくても問題ない述語である。

<sup>3</sup> 対象の定性や数と結果キャンセル構文の容認可能性の関係については、崔(2009)も参照。

<sup>4</sup> 本稿では議論の視覚化のために語彙概念構造を用いるのみであり、語彙概念構造自体の規定を目的とはしない。

は、とりあえず動作主の対象への変化のかかわり方を、変化への「責任」<sup>5</sup>と呼んでおく。そうすると、当然のことながら、結果キャンセル構文を考えるにあたっては、動作主の対象の変化に対する「責任」について考えなければならない。動作主が対象の変化に対してなら「責任」を負っていないのであれば、行為者側としては対象が変化することに関しては無関係であるので、対象の変化が起こらなくても構わない。xの行為が対象の変化を期待して行われていても、必ずしもその変化が達成されない場合は、上記の「ビールを冷やす」の例の様に十分に存在するが、これがどこまで語彙的意味の問題として捉えられるかを検証しなければならない。

ここでは「責任」という概念を導入したが、これは当節以降で述べるように、動詞の意味から結果キャンセル構文の成立条件を考えた時に二次的に出てくる概念である。この「責任」という概念がいかにして語彙的意味の問題に還元できるかを次節以降で考察していく。

以上まで述べてきたように、達成動詞が〈変件事象〉をその語彙意味内に含んでいるとすれば、〈変件事象〉に対応する自動詞を後件で用いて否定することは意味的な矛盾である。この矛盾を回避するためには、達成事象の〈変件事象〉が、あくまでも〈活動事象〉に「意図される」変化結果である必要がある。つまり、例(8)で示された語彙概念構造の、〈活動事象〉と〈変件事象〉をつなぐ意味述語「CAUSE」がここでは問題となる。以下、達成事象を表す他動詞とそれに対応する自動詞の意味を考察することで、〈活動事象〉と〈変件事象〉のかかわりを明らかにする。

### 4.3 〈変件事象〉の自律性

達成動詞の〈活動事象〉と〈変件事象〉が、前節の例(8)のように、意味述語「CAUSE」で結ばれるとすると、活動の変化結果が必ず意図されてしまうので、後件で変化結果を否定すると意味的に矛盾してしまう。そこで、影山(1996)は、日本語において結果キャンセル構文が成立するという事実に基づいて、〈活動事象〉と〈変件事象〉をつなぐ意味述語を、「CONTROL」とするべきであると主張した<sup>6</sup>。

(9) X CONTROL Y (X:〈活動事象〉、Y:〈変件事象〉)

(影山 1996: 86)

影山によると、Y(〈変件事象〉)に「焦点」または「際立ち」が置かれると、「CONTROL」は実質的に「CAUSE」の意味に解釈される。しかしこの定式化では、すべての達成動詞に結果キャンセル構文が成立する可能性を持たせてしまう。加えて、先行研究で指摘されているような動詞間の当該構文の容認可能性の差を、「焦点」または「際立ち」の置かれ方の

<sup>5</sup> 「責任」という概念は、影山(1996:86)においても、結果キャンセル構文に関する分析に用いられている。

<sup>6</sup> 一方アラム佐々木(2001)は、〈活動事象〉と〈変件事象〉を結ぶ意味述語を「INTEND TO CAUSE」としているが、ここではとりあえず影山(1996)にそって「CONTROL」を採用しておく。

差異に求めなければならないが、その定式化は難しいように思われる<sup>7</sup>。

すでに 4.1 節で述べたように、当該構文の容認可能性には、動作主の〈変化事象〉への働きかけのあり方がかかわっていると考えられる。この「働きかけのありか方とは、すなわち「使役」の意味構造の問題と捉えることが可能である。

「使役の意味構造」について、丸田(1998)は、「使役」が例(8)のように、意味述語「CAUSE」のみでは捉えられないと主張した<sup>8</sup>。丸田は、使役の構造が、Talmy(1985)の「オンセット使役(onset causation)」と「同延使役(extended causation)」のように二種類に分けられるとした。丸田によると、「オンセット使役」とは、「使役主がある「自立(律)的」<sup>9</sup>行為体を活性化させ—例えば、始動のきっかけを与えたり、動力を供給して—その行為体を通じてある結果出来事を実現させる使役タイプ(丸田 1998: 99)」である。一方「同延使役」とは、使役主が「結果の出来事の生起から完了まで完全な責任を負っており、「使役の対象側で外力の支配から自立した形で独自の出来事が実現されることはない(丸田 1998: 99)」使役タイプである。本稿でも、この二種類の使役タイプを認め、同延使役の場合には結果キャンセル構文が容認されないと主張する。つまり、同延使役の場合、行為者は対象の変化に完全に「責任」を負っており、前件の行為の結果を打ち消すことができないというわけである。

そこで、上記のような二種類の使役の意味構造がどう使い分けられるかを規定しなければならないが、本節では〈変化事象〉の「自律性」に注目する。変化対象に「自律性」が認められるのであれば、行為者は必ずしも対象の変化に「責任」を負わないことになるので、後件でその行為の結果がキャンセル可能となる。そこで、この「自律性」を言語的に規定しなければならないが、その前にまず、影山(1996)の脱使役化による自他交替の議論を概観する。

影山は、他動詞から自動詞が派生される際の「自動詞化」にかかわる接尾辞が、-e- (割る—割れる等)、-ar- (植える—植わる等)の二種類に大別されるという。なかでも-ar-自動詞は、意味的に動作主の存在が前提となっており、この-ar-自動詞は「動作主なしに」という意味の副詞「勝手に」と共起しない。

(10) a. \*勝手に、箱に本が詰まった。

b. \*勝手に、庭に木が植わった。

<sup>7</sup> また、影山(1996)は、結果キャンセル構文の容認可能性が日英語で異なることを「視点」という観点から説明している。影山によると、ある状態に「なる」ということを重視する「ナル型言語」である日本語は、語彙概念構造上の行為と結果の中間に位置する「BECOME」の位置に視点が存在し、「結果」を見ることも見ないこともできる。したがって、「結果」が視界に入らない時には当該構文が容認可能になるという。ただこの場合も、「焦点」、「際立ち」と同様の理由で達成動詞間に見られる当該構文の差異に関する説明が難しいと考えられる。

<sup>8</sup> 丸田(1998)は、使役の意味構造の二分類を使役起動交替の説明に用いており、正確には本稿が意図するような概念ではないが、ここではその考え方の有用性を認め援用する。

<sup>9</sup> 「自立(律)的」な出来事とは、その主参加者が、自らの責任で成立させる独自の出来事である(丸田 1988:99)

c. \*ピカソの絵が勝手に壁に掛かった。

(影山 1996: 189)

たとえば例 (10b) の「植わる」の場合、「木」は自ら「植わる」という変化を引き起こす性質を持っていない。「植わる」という変化事態が起こるには、必ずその変化が完了するまでその変化を引き起こす動作主が必要となる。「植える」という行為をする動作主の行為無しに、「植わる」という事態は起きないのである。

そこで本稿では、例 (10) で見たように、「勝手に」が共起しない場合に、変化に「自律性」がないとする。したがって、例 (10) の動詞は、対象が「自律」的に変化しないために、結果キャンセル構文が容認されないと予測されるが、実際にその通りの結果が出る。

(11) a. \*本を詰めたけれど、本は詰まらなかった。

b. \*木を植えたけれど、木は植わらなかった。

c. \*ピカソの絵を掛けたけれど、絵は掛からなかった。

一方で「燃やす」のような結果キャンセル構文が容認可能な動詞は、自動詞で表される変化事態が、動作主の存在なしに起こる。

(12) a. 落ち葉が勝手に燃えた。

b. 燃やしたけれど、燃えなかった。(再掲 (3))

「燃える」という変化は動作主の存在を前提としないため、例 (12a) の様に表現することが可能であり、例 (12b) が容認可能な文となる。ここで重要なのは、例 (12b) の文の容認可能性が、「動作主が行なうのは「火をつける」等の行為であり、対象が「燃えた」かどうかには動作主が関知しないから」という現実的な問題に起因するのではなく、「燃える」という動詞そのものが、その語彙的意味として「変化の自律性」を有しているからである。

以上本節では、まず、現実の問題として、動作主の行為が対象の変化に「責任」を負っていない場合、結果キャンセル構文が容認できると考えた。そして、動作主の対象に対する働きかけの種類に、オンセット使役と同延使役の二種類が存在すること認め、結果キャンセル構文が成立するためには、「対象の変化の自律性」が必須であると主張した。この「変化の自律性」というのは言語的な問題であり、4.2 節の段階で導入した「責任」という概念は、この「変化の自律性」に伴って現れる二次的な概念である。したがって、当該構文が成立するためにもっとも大切な概念は「変化の自律性」ということになる。

## 5. 漸進性

前節までは、結果キャンセル構文が成立するために必要な要件を検討したが、本節では、さらに、「漸進性」という概念が当該構文の容認可能性にかかわっていることを示す。以下、

「漸進性」の観点から、自他交替を起こす達成動詞の意味構造を明らかにする。

## 5.1 他動詞の意味構造と漸進性

本稿での「漸進性」とは、「徐々に進んでいくこと」であるが、「漸進性」があるとは「時間の幅」が認められるということであるので、必然的に「継続」という概念が重要になってくる。動詞の語彙的特性を捉えるにあたって、「瞬間」、「継続」などの時間的概念が重要な役割を果たすことはすでに先行研究で指摘されている（金田一 1950 等）。「継続」が動詞の意味に含意されているかを判断するための一つの指標として、継続時間副詞「～間」との共起関係が挙げられる（Vendler 1967, Dowty 1979 等）。たとえば、活動動詞は活動の継続を意味するので「～間」と共起するが、到達動詞は瞬間の変化を意味するので「～間」と共起しない。

- (13) a. 10 分間走った。  
b. \*10 分間駅に着いた。

しかし達成動詞の場合、この継続時間副詞句との共起関係をみると、常に一様の様相を見せるわけではない。たとえば、当該構文が容認されやすい達成動詞「燃やす」、「冷やす」、「乾かす」などは、当該構文が容認されにくい「割る」とは異なって、活動期間を表す継続時間副詞句「～間」と共起する。

- (14) a. 10 分間燃やし/冷やし/乾かした。  
b. #10 分間割った。

例 (14) に見られるように、達成動詞には継続時間副詞句と共起しやすいものとしにくいものがある。これは、これらの達成動詞がもつ〈活動事象〉が継続的であるか否かを示しており、「燃やす」などの〈活動事象〉が継続的である一方で、「割る」の〈活動事象〉が瞬間的であることが分かる<sup>10</sup>。「割る」が継続時間副詞句と共起できるのは、「行為の反復読み」を行う場合である（Kearns 2000）。例 (14b) は、「割る」という一行為が開始して終了するまでに 10 分間かかったという読みではなく、何度も「割る」という行為を繰り返したという意味や、複数の対象に対して働きかけつづけるという意味ならば解釈可能である。しかし、(14a) で見られるように、「燃やす」などはそのような特殊な意味でなくても、「一行為が開始して終了するまで 10 分間かかった」という読みが可能である。このように「燃

<sup>10</sup> 〈活動事象〉を表す活動動詞の多くは継続時間副詞句と共起するが、問題となるのは、「くしゃみをする」などの単一相(semelfactive)動詞である(Comrie 1976, Smith 1991)。ここではとりあえず単一相動詞が活動動詞として捉えられると仮定しておく、「#10 分間くしゃみをする」とは言えないので、活動動詞であっても継続時間副詞句と共起できないことになる。つまり、継続時間副詞句との共起関係において重要なのは、〈活動事象〉の有無ではなく、〈活動事象〉が継続的であるか否かである。



やす」などの動詞は、〈活動事象〉が継続的であるのに加えて、例(15)の様に表現することも可能であるので、「どこかで変化する」という「完結点」も持ち合わせている。

(15) 10分間で燃やし/冷やし/乾かした。

したがって、「燃やす」などの動詞は「一つの対象に対して、変化の完了点まで継続的に目標とした変化に向けて働きかけられる」という点で、変化に「漸進性」が認められる。

## 5.2 自動詞の意味構造と漸進性

本節では、前節での「漸進性」の議論を自動詞の意味構造からも明らかにする。

他動詞「燃やす」に対応する自動詞「燃える」、「冷やす」に対応する「冷える」、「乾かす」に対応する「乾く」などは、点的な変化ではなく、段階性を持った変化であると考えられる。この事実は、完結を表す複合動詞「～きる」との整合性を見ると分かる<sup>11</sup>。

(16) a. 燃え/冷え/乾ききった。

b. \*割れ/壊れ/潰れ/死にきった。

また、「10分かけて乾いた」などは容認されるが、「10分かけて死んだ」などは容認されにくいなどの事実からも、「変化」が点的なものとして捉えられるかどうかの違いによると考えられる。つまり、「燃やす」などの動詞の対象の変化が「漸進的」であることは、他動詞の意味構造からだけでなく、自動詞の意味構造からも支持されるのである<sup>12</sup>。この「変化の漸進性」も語彙概念構造で表すことが可能である(影山 1996, 2008, Jackendoff 1990 等)。影山(2008)にしたがうと、変化が段階的に起こったのちにある変化が達せられることは以下の様に表される。

(17) [y MOVE [P<sub>1</sub><P<sub>2</sub><...<P<sub>n</sub>]]BECOME[y BEAT-z] (影山 2008: 256 若干改変)

例(17)の「MOVE」は「BECOME」とは異なって徐々に変化していくことを示しており、P<sub>1</sub>やP<sub>2</sub>は変化の間に無数に存在する変化の経由地点である。この漸進性に関しては、早津(1989)が大変示唆的である。早津は、有対他動詞が基本的に「働きかけの結果として生

<sup>11</sup> 英語の melt や cool は、「変化」という点では到達動詞として捉えられるが、継続時間副詞句と共に共起できるなど、通常の到達動詞とは異なる点が存在する。これらは、「変化が徐々に達成される」という点から、「程度到達動詞(degree achievement verb)」と呼ばれる(Dowty 1979, Hay 1998, Hay, Kennedy and Levin 1999)。日本語の「冷やす」などの動詞は、英語の degree achievement とは正確には対応しないが、本稿での議論は、この概念を援用することで結果キャンセル構文の容認可能性を探っているものである。

<sup>12</sup> 佐藤(2005)は、「燃やす」という動詞において、「対象が漸次的に変化する」ということが、容認度の違いに影響している可能性がある」と指摘しているが、これは、動詞の意味の問題ではなく、「動詞の意味によって指示される状況の特徴に由来する想起のしやすさ」であるとしている(佐藤 2005:106)。本稿では佐藤の立場とは異なり、この「漸次性」が語彙的に認められるものであることを主張している。

じる状態を含意する動詞が多い」ことを明らかにしているが、一部の動詞ではこの結果の状態が含意されていないように見える例として以下のような例を挙げている。

- (18) 赤児の身体は段々に冷えて来た。……熱湯で絞ったタオルでそれを防ぐことにした。  
……背中、胸、足と包んでやっていた。温めても温めても赤児は中々温まらなかった。  
(志賀直哉『和解』 早津 1989: 238)

早津は例(18)をもって、「温める」という他動詞形に対しては「温まる」という自動詞形が存在するにもかかわらず「温める」の変化結果を打ち消すことができると述べている。そしてこの現象に対して、「温める」はその行為の完了までに時間のかかる働きかけであるので、そういった場合には有対他動詞であっても「温めても温まらない」のように表現することができるで一応は考えられ、それは、「発話者が期待している「温まる」状況に至らなかったということである」という説明を加えている。また例(18)が許容される理由を、「温めても」が表しているのは、「温めようとしても」とか「温めたつもりでも」という程の意味なのである」としている。本稿では、「温めたけれど、温まらなかった」の「温めた」が、「温めようとしても」や「温めたつもりでも」と読み替えられているとは考えないが、早津の「発話者が期待している「温まる」状況に至らなかった」というところが重要であると考えられる。つまり、(17)に見られるように、Pがいくつも存在し、変化が点的でないのであれば、話者が想定する達成されるべき変化に幅が出て、早津が主張するように、その「想定」に達しなかったという意味で、結果キャンセル構文が成立しても問題はないと考えられる。したがって、対象の変化に漸進性が認められる場合には、「変化点の設定」が任意になりやすく、結果キャンセル構文が容認されやすくなる<sup>13</sup>。

漸進性の観点が結果キャンセル構文の容認性に関わることは、「割れる」などに副詞句等で変化に幅を持たせると、当該構文が容認しやすくなることから示唆される。

<sup>13</sup> 杉岡(2002, 2009)では、「温まる」、「暖まる」などの動詞は、他動詞に自動詞化接辞「-ar-」が付加されることによって派生されていると主張している。杉岡によると、「温まる」への変化のプロセスは、影山(1996)で提案されている「脱使役化」というプロセスであり、これは「植わる」等の動詞と同様に、「変化の自律性」が存在しない。そのため、本稿での主張からすると、結果キャンセル構文が成立しないことを予測するが、早津(1989)でも指摘されているように、当該構文が容認されるように思われる。この件に関して、自他交替を含めた本質的な解決は今後の課題とせざるを得ないが、「温まる」、「暖まる」に関しては例外的に扱えると本稿では考える。例えば、杉岡(2002)では「暖まる」と同様の派生のプロセスを経るものとして、「道が狭まる」、「会議の日程が早まる」などが挙げられているが、「勝手に」との共起テスト(cf.杉岡 2009)、複合動詞「一きる」が接続できるかについて考えてみると、「暖まる」は他の二つの動詞に比べて明らかに容認度が高いように思われる。

- (i) a. 身体が勝手に暖まった。  
b. 身体が暖まりきった。  
(ii) a. \*川幅が勝手に狭まった。  
b. \*川幅が狭まりきった。  
(iii) a. \*会議の日程が勝手に早まった。  
b. \*会議の日程が早まりきった。

したがって、本稿では、「温まる」、「暖まる」を用いた結果キャンセル構文の容認可能性も、本稿の議論の枠内で説明可能であると考えられる。

- (19) a. 太郎は空き缶を潰したけれど、完全には潰れなかった。  
 b. 子供が大きな模造紙を切ったが、手が疲れてしまい最後まで切れなかった。

例 (19) に見られるように、「完全に」、「最後まで」等の副詞句が現れることによって、「潰れる」、「切れる」という変化に対して幅が生まれる。(19a) は、空き缶自体は潰れているが、「空き缶がペシャンコになるという状態は達成できなかった」ということであり、(19b) は、模造紙自体は切れているが、「目標とする模造紙の状態を達成することができなかった」ということである。そのいずれも、話者の「想定」により、変化が漸進的になり、「想定が達成されなかった」という意味で結果キャンセル構文が容認可能となるのである。しかし、「死ぬ」は、例 (19) に見られるような副詞句を伴っても容認されにくい。

(20)??太郎がその害虫を殺したが、完全に/最後まで死ななかった<sup>14</sup>。

例 (20) が容認されにくいのは、「死ぬ」に漸進性が読み込みにくいからである。

以上のように、対象の変化に漸進性が読み取れる場合には、結果キャンセル構文が容認されやすくなる。「冷える」などが語彙的に漸進性を有しているのに対して、「割る」などは語彙としてはそのような漸進性を有していないということになる。また、「割れる」と比べて、「死ぬ」はその漸進性を、文脈などを整えて読み込むことも難しい。したがって、本稿の議論が正しければ、結果キャンセル構文の容認度は「冷やす」などを用いた文 > 「割る」などを用いた文 > 「殺す」などを用いた文となるが、この予測は、実際にアンケート調査を行った先行研究の結果にそぐう<sup>15</sup>。

以上、本節では「変化の漸進性」が結果キャンセル構文にかかわっていることを見たと、その「漸進性」が当該構文の容認可能性といかに結びつくかを議論した。

## 6. おわりに

本稿では自他交替を起こす達成動詞を対象に、結果キャンセル構文の動詞間に見られる容認可能性の差異を以下の二点から説明した。

<sup>14</sup> 害虫の複数読みはここでは考えない。

<sup>15</sup> 青木・中谷(2013)、宮島(1985)、Aoki and Nakatani(2013)などを参照。例えば、宮島(1985)は、結果キャンセル構文の容認性のアンケートの結果を踏まえて、以下のように、動詞の「結果性のつよい順」を提示している(左に示されるものがより結果性が高い=当該構文の容認性が低い)。

(i) ころす>おとす>こわす>のむ>ぬく>ぬる>あける>わかす>ひろげる>のぼる>ほる>いれる  
 >うごかす>よわめる>もやす>かわかす>ひやす (宮島 1985:353)

(i)に見られるように、「殺す」は容認可能性が低く、「燃やす」、「乾かす」、「冷やす」などは容認可能性が高いことがうかがえる。「割る」は調査した動詞の中にないが、「壊す」とほぼ同じような意味を持つと考えれば、本稿で示したように、「殺す」タイプの動詞 > 「割る」タイプの動詞 > 「冷やす」タイプの動詞という容認可能性の度合いが認められる。宮島(1985)ではそのほかにも様々な動詞がテストされ、「結果性のつよさ(=当該構文の容認可能性)」が比べられているが、これらは、本稿でも言及した語用論的な漸進性の読み込みやすさなどに加えて、対象の特性など他のさまざまな要素に左右されていると考えられる。

(21) ①【変化の自律性】

結果キャンセル構文は変化対象が外的な力なしに自律的に変化するものでなければ成立しない。

②【変化の漸進性】

結果キャンセル構文が容認されやすい動詞は、変化事態が漸進的である場合が多く、「変化の達成点」が話者によって異なるので、容認可能性が上がる。

「変化の自律性」は動作主と変化対象の関係で、使役の意味構造に関する議論と深くつながっており、当該構文の成立の可能性に関与している。「変化の自律性」が認められるものは、動作主の働きかけとは独立して変化が達成されるので容認可能な文となる。加えて、「変化の自律性」が認められるものの中でも当該構文の容認性には傾向が見られ、それは、「変化の漸進性」で説明できる。「変化の漸進性」があれば、動作主の行為から変化事態の発生までに幅が生まれる。この「変化の漸進性」が語彙的に存在する場合は当該構文の容認可能性が上がり、また、文脈的な漸進性の読み込みやすさでも当該構文の容認可能性が異なることが明らかになった。

先行研究では、語用論の観点から結果キャンセル構文が容認されるメカニズムを明らかにするものや、目的語や副詞句を含めた節全体から導き出される「結果性」の観点から当該構文が分析されることが多かった。語用論的知識も含めたホーリスティックな解釈の問題としてこの構文の容認可能性を論ずることを否定するものではないが、本稿では、当該構文の容認可能性の差異の重要な部分は、動詞が内在的に持つ語彙的意味に基づいてより分析的な観点から説明されるべきであることを示した。

特に「漸進性」という概念は、動詞の意味構造を考えるにあたって重要な概念であるが、この概念が結果キャンセル構文の容認性の差異にかかわっていることを明らかにした。また、自動詞で表される事態の「自律性」は、当該構文の容認可能性の有無を考えるために重要な概念であるが、この概念は先行研究でも自他交替の概念として重要であり、本稿の議論が自他交替の議論に役立つ可能性が十分に存在する。

**【参考文献】**

青木奈津乃・中谷健太郎(2013)「事象キャンセル可能性についての質問紙調査—その詳細データ—」『甲南大学紀要 文学編』163, pp. 41-57.

アラム佐々木幸子(2001)「燃やしたけれど燃えなかったのはなぜ?—「弱い達成動詞」と「強い達成動詞」」『言語学と日本語教育Ⅱ』南雅彦・アラム佐々木幸子編, くろしお出版, pp. 57-74.

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版

影山太郎(2008)「語彙概念構造(LCS)入門」『レキシコンフォーラム』影山太郎編, ひつじ書房,

pp. 239-264.

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp. 48-63. [金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp. 5-26.に再録]
- 崔玉花(2009)「日中英における動詞のアスペクト対照研究—結果性に関わる諸現象の考察から—」筑波大学博士論文
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 杉岡洋子(2002)「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」『文法理論—レキシコンと統語—』伊藤たかね編, 東京大学出版会, pp. 91-116.
- 杉岡洋子(2009)「形容詞から作られた動詞」『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』影山太郎編, 大修館書店, pp. 191-222.
- 蔡盛植(2004)「日本語の動詞にみる結果性—結果キャンセル構文に関する一考察—」『次世代の言語研究Ⅲ』筑波大学現代言語学研究会編, pp. 111-145.
- 早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95, pp. 231-256.
- 丸田忠雄(1998)『使役動詞のアナトミー』松柏社
- 宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における<結果性>—」『計量国語学』14-8, pp. 335-353.
- Aoki, Natsuno and Nakatani Kentaro(2013) Process, Telicity, and Event Cancellability in Japanese: A Questionnaire Study, *JELS30*, pp. 257-263.
- Comrie, Bernard(1976) *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge University Press. Cambridge.
- Dowty, David(1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Reidel. Dordrecht.
- Hay, Jennifer(1998) The non-uniformity of degree achievements. M., Northwestern University, Evanston.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin(1999) Scalar Structure Underlies Telicity in “Degree Achievements”, *SALT9*. CLC Publications. Ithaca, pp. 127-144.
- Kearns, Kate(2000) *Semantics*. London: Macmillan.
- Ikegami, Yoshihiko(1985) 'Activity'-'accomplishment'-'achievement': A language that an't say 'I burned it, but it didn't burn' and one that can. Adam Makkai and Alan K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy: Essays in honor of Rulon S. Wells*. John Benjamins. Amsterdam/ Philadelphia, pp. 265-304.
- Jackendoff, Ray(1990) *Semantic Structures*. MIT Press. Cambridge, MA.
- Pustejovsky, James(1991) The Syntax of Event Structure, *Cognition* 41, pp. 47-81.
- Smith, Carlota(1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers. Dordrecht.
- Talmy, Leonard(1985) Force Dynamics in Language and Thought. *Papers from the Twenty-first Regional Meeting of the Chicago*. IL, pp. 293-337.

Vendler, Zenos(1967) *Linguistics in philosophy*. Cornell University Press, Ithaca, NY.

### 謝辞

本稿の執筆にあたっては、竹沢幸一先生、杉本武先生、沼田善子先生からたくさんの貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝する。尚、本稿の誤りはすべて筆者の責任である。